

「大地有情同時成道」に関する一考察

——特に道元門下の立場をめぐって——

石 島 尚 雄

はじめに

道元禪師の「大地有情同時成道」の典故については、いまだに詳らかではない。夙に私は、『宗学研究』37号で、『大地有情同時成道』に関する一考察と題して発表したのであるが、そこで、道元禪師（以下道元と省略）の「明星出現時、我与大地有情同時成道」というフレーズは、真浄克文（二〇二五—一〇二〇）の「明星現時。豁然悟道。大地有情。一時成仏⁽¹⁾」の表詮と、宏智正覚（一〇九一—一一五七）の「山河大地草木叢林。与⁽²⁾覺上座同時成道」の表詮を踏まえた上での道元の造語ではないかと推量した。そこで、今回は、作業仮定として、道元の真意をより深く理解する為に、道元門下の「大地有情同時成道」を吟味したい。そして次の機会に、道元に先立つ世代と道元以後の世代とその間の道元とを一連のコンテクストの上で考察する基礎としたい。

一、詮慧・経豪における「大地有情同時成道」

道元以前では「大地有情同時成道」のフレーズは、そう頻繁には出てこない⁽³⁾。道元にしてはじめて一連の意味をもって表詮されるようになる。しかるに、道元門下、特に詮慧・経豪・磐山などにおいては頻繁に出でくる。特に、詮慧・経豪の『正法眼藏聞書抄』においては、枚挙にいとまがない程である。そこでそれらの代表的なものを検討しよう。

『聞書抄』有時に、

…、コノユヘニ同時発心アリ、同心発時也、ヲヨヒ修行成道モ如⁽⁴⁾此、ノ…、此道理ナルユヘニ、同時発心モアルヘシ、同心発時モアリトハ、成道ト云道理タニモ、イテクレハ、大地有情同時成道ノ理ヲ離テ、成道ト云事不⁽⁵⁾可有、始ソ終ソ、昔ソ今ソナムト云沙汰ニ不⁽⁶⁾及ナリ、ユヘニ同時成道ト許必不⁽⁷⁾可⁽⁸⁾談、同時発心モアルヘシ、同心発時モアルヘキナリ、同時成道ノ詞許ニカカハラ

サルヘキ道理ヲ、如^レ此被^レ釈ナリ（『曹洞宗全書』へ以下曹全）注
解一、444b~445a）

とある。ここでは、「同時成道」の「同時」に引き寄せられ、『有時』の巻の「時」に関連せる内容に注を振つたものと思われる。中でも、「大地有情同時成道ノ理ヲ離テ、成道ト云事不可^レ有」とあるところに注目してみると、ここでは、既に「大地有情同時成道」が熟した成語であると見做されていることが看取される。なぜならば、「大地有情同時成道ノ理」といって、『聞書抄』を編纂している門下の間では、説明する必要もない、自明の理と見做されている感があるからである。

次に『聞書抄』諸悪莫作を見ると、

釈尊一仏ノ始終ニツキテ、説法ノヤウ機ニ随ヒ物ニヨリテコトコトナリ、イカニイハムヤ、前仏後仏、此他仏、浄土穢土、皆以異ナルヘシ、シカアレトモ、是等ノ異ハ、釈尊一代ニ三界ヲ唯心ト説キ、諸法ヲ実相ト示シ、凡悩ヲ菩提トイヒ、生死ヲ涅槃ト云程ノカハリナリ、イハムヤ此仏モ、大地有情同時成道ト宣へ、他仏モ大地有情同時成道ト説ノミナリ、此等ノ義、同トモ不同トモイハムニ、違スヘカラサル道理ナリ（『曹全』注解一、675b）

とある。ここでは、仏は、方便で対機説法を様々にするけれども、それらの違いは、わずかな違いであつて、言わんとするところは、此土の仏も、他土の仏も「大地有情同時成道」

「大地有情同時成道」に関する一考察（石 島）

と説くのみだといっている。ここを見るに、『聞書抄』では、釈尊は「大地有情同時成道」だけを説いたのだと、あたかも断定しているかのようなのである。この箇所だけをとつて見ても、「大地有情同時成道」のフレーズが、『聞書抄』ではかなりウエイトを持ったフレーズであることが看取される。

次に、『聞書抄』行持を見ると、

慈父大師釈迦尼^牟牟^牟公段、大地有情同時成道ノ行持アリト云ハ、行持ハ成道以前時刻トコソ聞ユレ、十九歳已後三十成道已前ナルヘキ行持ヲ、成道行持ト云事ハ、教行証ヲ、三ニタテサリイハレナリ（『曹全』注解一、363a）

とある。『正法眼蔵』の本文では、「慈父大師、釈迦牟尼仏、十九歳の仏寿より、深山に行持して、三十歳の仏寿にいたりて、大地有情同時成道の行持あり」（行持上）となつていて、この箇所の注と思われる。しかし、『抄』のほうは、「如^レ文」とあるのみで「大地有情同時成道」の注はない。したがつて、『抄』を編纂する段階では、注を振る必要がないほど自明の理であつたことが推測される。

次に『聞書抄』授記を見ると、

未発菩提心ト云モ授記ノ上ノ未発菩提心ナリ、今ノ授記ハ山河大地、須弥巨海、張三李四、聞得一句ナムト云、不審ナル様ナレトモ、仏成道ノ時、大地有情同時成道ト被^レ仰ヌルトキニ非^レ可^レ疑（『曹全』注解一、480b）

とある。ここでは、未だ菩提心を発さ^{おぼ}ないときにも授記があるとするのはよくわからないことの様に思えるが、「大地有情同時成道」という以上これは疑り余地のないことであると主張している。してみると、『聞書抄』を編纂している門下の間では、既に定着していたフレーズであることが推測される。

次に、『聞書抄』十方を見ると、

タタ十方ハ一方ト心得ナリ、毎物ノ上ニ、十方ハ取ヘシ、一塵ノ上ニモ仏土アルヘシ、或身土不二トモトキ、或大地有情同時成道トモイフ、コノトキ国土モ、十方モアルヘカラサルカ（『曹全』

注解二、250 b）

とある。この中で「或身土不二トモトキ、或大地有情同時成道トモイフ」というところに注目してみると、いわゆる禪家の「大地有情同時成道」という語が、天台教理でいう不二門すなわち、荆溪湛然がとなえた十不二門などと関連性をもたせて述べられることが分かる。少なくとも、『聞書抄』を編纂している門下達にとってそれは違和感のない自然な表詮であったことが看取される。

次に、『聞書抄』如来全身を見ると、

龍女ノ成仏ハ止息ノ道理ト可ニ心得、仏ノ成仏トコソイフヘケレ、草木国土悉皆成仏ト云モ大地有情同時成道ト云モ皆同心ナリ（『曹全』注解二、447 a）

とある。この中で、「草木国土悉皆成仏ト云モ大地有情同時成道ト云モ皆同心ナリ」という表詮に注目すると、道元では日本天台との接点がなかなか見出せないのに対して、かえって門下の詮慧等の方に、日本天台との接点が見えてくるのが興味深い。

以上調べて来たのであるが、いずれにしても、詮慧をはじめとする道元の直弟子の間において、「大地有情同時成道」というフレーズが完全に定着していたことを推測させるのであるが如何かであろうか。また、門下の間では、禪家の「大地有情同時成道」という表詮が、中国天台にも、日本天台にも関連させて叙述されている事実は、決して看過できぬものといえよう。

二、瑩山における「大地有情同時成道」

詮慧・経豪とくらべて、瑩山禪師（以下瑩山と省略）になると、「大地有情同時成道」はより一層重要性を増してくる。

『伝光録』を見ると、

…、釈迦牟尼仏、見明星悟道曰、我与大地有情同時成道、…イハユル我トイフハ、釈迦牟尼仏ニアラズ、釈迦牟尼仏モコノ我ヨリ出生シキタル、タダ釈迦牟尼仏出生スルノミニアラズ、大地有情モ、ミナコレヨリ出生ス、大綱ヲアグルトキ、衆目悉クアガルガゴトク、釈迦牟尼仏成道スルトキ、大地有情モ成道ス、タダ大

地有情成道スルノミアラズ、三世諸仏モミナ成道ス、怎麼ナリトイヘドモ、釈迦牟尼仏ニオイテ、成道ノオモイヲナスコトナシ、大地有情ノ外ニ、釈迦牟尼仏ヲミルコトナカレ(『曹全』宗源下、278 a ~ b)

とある。この則は明らかに、『正法眼藏発無上心』を踏まえている。磐山においては、「大地有情同時成道」というフレーズは、単なる造語ではなくして、完全に定着した熟語と見做されていることが看取される。なぜなら、門下に説き示す問話の初端からいきなり「大地有情同時成道」が出てくるからである。更に、拈提では、「イハユル我トイフハ、釈迦牟尼仏ニアラズ、釈迦牟尼仏モコノ我ヨリ出生シキタル」と述べているが、この箇所を克文の「明星現時。豁然悟道。大地有情。一時成仏」を引き合いに出して比較したのならば、もはやこの磐山の拈提は成立しなくなる。したがって、磐山においては、「大地有情同時成道」でなければならぬ理由が厳然としてあるのである。

おわりに

私は夙に、道元の「明星出現時、我与ニ大地有情ニ同時成道」について考察を加えてきたのであるが、いまだに直接の典拠を見出すことができない。しかし、道元がそれを踏えた表現として、真浄克文の「明星現時。豁然悟道。大地有情。

「大地有情同時成道」に関する一考察(石 島)

一時成仏」と、宏智正覚の「山河大地草木叢林。与覺上座ニ同時成道」を見出した。更に、道元はこれを踏えて、「明星出現時、我与ニ大地有情ニ同時成道」を造語したのではないかと推測した。

しかし、その門下となるといささか様相を異にする。少くとも、直弟子たる詮慧・経豪や次の世代にあたる磐山ではある種の既成事実化している。たとえば、「大地有情同時成道ノ理ヲ離テ、成道ト云事不_レ可有」とか、「此仏モ、大地有情同時成道ト宣へ、他仏モ大地有情同時成道ト説ノミナリ」とか、「仏成道ノ時、大地有情同時成道ト被_レ仰ヌルトキニ非_レ可_レ疑」とか、「或身土不二トモトキ、或大地有情同時成道トモイフ」とか、「草木国土悉皆成仏ト云モ大地有情同時成道ト云モ皆同心ナリ」…等がそうであり、更に、磐山の「イハユル我トイフハ、釈迦牟尼仏ニアラズ、釈迦牟尼仏モコノ我ヨリ出生シキタル、タダ釈迦牟尼仏出生スルノミアラズ、大地有情モ、ミナコレヨリ出生ス」等がそうである。特に磐山の拈提などは、皆が知っている既成事実としてとらえているのでなければ、とうてい説明できない。

以上のことから、「我与大地有情同時成道」というフレーズは、道元門下において既に定着した熟語になっていたことが知られる。このことはいったい何を意味しているのだろうか。すくなくとも、道元以前の人々よりも、道元以後の門下

の人々にとつて「大地有情同時成道」がより一層重要なものになっていくことがわかる。私が推測するに、それは、「大地有情同時成道」という語が、他流とは違った道元の宗風の特徴を表わすのに丁度良い語であると位置付けられていたふしがあるのである。

ともあれ、ここまで来ると道元その人の「大地有情同時成道」の意義を検討すべき時がいよいよ来たといえよう。ここに、道元の「大地有情同時成道」の考察を今後以期して、今回の論考をおわりたいと思う。

- 1 大慧『正法眼藏』六、(Z・118、69b)、『普灯録』四、(Z・137、45d)、『聯灯会要』一四、(Z・136、330d)等を参照。
- 2 『宏智禅師広録』一、(T・48、1c)を参照。
- 3 例えば、栄西の『興禅護国論』を参照するに、「大地有情同時成道」の語を見出すことは一度もないのである。
- 4 山内舜雄、『続正法眼藏聞書抄の研究』二五三頁に、「…、この『聞書』の注なども、発想法そのものが教学的であることは言うまでもない。それだけに解りがよい、というものは、証を三ニタテサルすなわち教行証を一如と道取するところに宗意があり、それが行持と表詮されるからには、大地有情と同時成道の行持が成り立つ、という論法である。しかし、「教行証ヲ三ニタテサルイハレナリ」と、教を突き放つてしまえば、あとは同時成道の行持という宗意しかのこらず、教との異和感是否定すべくもない。そして、注者詮慧が、最も痛切に感じたであろうこの異和感こそ、実は道元禅の特質の裏がえしとも思われるのであるから、重要である。」とある。
- 5 『十不二門』に、「一者色心不二門。二者内外不二門。三者修

性不二門。四者因果不二門。五者染淨不二門。六者依正不二門。七者自他不二門。八者三業不二門。九者權実不二門。十者受潤不二門」(T・46、703a)とある。

6 日本天台は道邃(一一〇六一―一五七?)の『摩訶止観論弘決纂義』一に、「正報転時。依報随転。一仏成道観見法界。草木国土皆悉成仏」(大日本仏教全書15、327b)とある。

7 田島柏堂、『日本の禅語録』五、瑩山231頁に、「明星を見て本則は、直接には『正法眼藏発無上心』に依っているとと思われる」とある。

8 石井修道、『道元禅の成立史的研究』の四五二頁に「道元仏の性格を検討することを最大の目的とする本論にとつて、…、問題を絞つて四つの点に言及したい。第一点は、本則に「大悟」等の語が加えられたことが指摘できよう」とある。氏は、道元の本文に更に加うるに、「見…悟道」があるとして、『伝光録』が「悟則」としての性格を打ち出す上で、「大地有情同時成道」が必要であったことを指摘する。

〈キーワード〉 大地有情同時成道、正法眼藏聞書抄、伝光録

(曹洞宗宗学研究所研究員)